

NHK学園生涯学習フェスティバル

鎌倉市短歌大会

令和元年五月十六日（木）午後一時～四時

鎌倉芸術館 小ホール（神奈川県鎌倉市）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長

砂押 宏行

一、選者紹介

一、鼎談「四季の移ろいを詠む」

大下 一真

尾崎左永子

永田 和宏

— 休憩 —

第二部

一、表彰

一、選評

「まひる野」

大下 一真

「星座」

尾崎左永子

NHK学園短歌講座監修・「塔」

永田 和宏

NHK学園短歌講座講師・「かばん」

東 直子

（五十音順）

一、当日詠「鎌倉の夏を詠む」入選発表

NHK学園短歌講座専任講師・「未来」

中川佐和子

「かばん」

東 直子

総合司会 フリーキャスター

北林きく子

ごあいさつ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 鎌倉市短歌大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「山」をあわせて二千九百二十二首にのほりました。お寄せいただいた短歌の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてくれます。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、短歌を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらっしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十八年に開設された短歌講座は、これまでの三十五年間に、三十三万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や短歌学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投稿いただいた皆様、ご協力をいただいた神奈川県・鎌倉市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年五月十六日

選者のプロフィールとひとつと

(選者は五十音順)

鼎談・選者



大下 一真 (おおした いっしん)

昭和二十三年静岡生

「まひる野」編集発行人

歌集『存在』『足下』『即今』『月食』『草鞋』

歌書『山崎方代のうた』など



尾崎左永子 (おざき さえこ)

昭和二年東京生

「星座」主筆、「星座 a」発行人

歌会始召人 (二十七年度)

歌集『さるびあ街』『夕霧峠』『薔薇断章』

『尾崎左永子短歌集成』など

たくさん作品を読ませていただきました。伝統あるこの短詩形に皆さまが真剣に立ち向かっておられることに感動いたしました。表現力にもう一步という作品が多かったのは残念ですが、逆に言えばまだのびしろがあるということ。さらなるご精進を期待します。

新幹線車窓に富士のやがて消えケータイに進む葬儀の相談

千何百年以上も前から詠みつづけられて来た「短歌」は、現代に至ってもなお、感動する心を率直に表現する型式として、数多くの人々に愛されている。人間の感覚、感情の表現法として幅広い支持を受けていることを改めて納得した。

戦前戦中戦後なほわが生きのびてはしげやし今暁の明星に逢ふ



永田 和宏（ながた かずひろ）
昭和二十二年滋賀生
「塔」選者

NHK学園短歌講座監修
歌集『饗庭』『永田和宏作品集1』『某月某日』
など
歌書『もうすぐ夏至だ』など

選者



東 直子（ひがし なおこ）
昭和三十八年広島生 「かばん」 会員
現代歌人協会理事

歌集『十階』 歌書『短歌の不思議』
小説『とりつくしま』『晴れ女の耳』
エッセイ集『七つ空、二つ水』
穂村弘との共著『しびれる短歌』
共編著『短歌タイムカプセル』など

当日詠選者



中川佐和子（なかがわ さわこ）

昭和二十九年兵庫生「未来」編集委員・選者
日本歌人クラブ中央幹事
NHK学園短歌講座専任講師
歌集『霧笛橋』『花桃の木だから』など
入門書『初心者にやさしい短歌の練習帳』

新元号になって初めてのNHK学園の短歌大会である。言うまでもなく、初めて国書を出典として元号が採られた記念すべき年。しかもそれが「万葉集」から採られたことに積極的な意味を見出したい。日本人の精神の基底を形成してきたものがすなわち和歌、そして短歌なのである。村のはづれといふところには白梅が咲いていかにも村のはづれだ

多様な作品に出会うことができました。鎌倉での大会、そして「山」というテーマということで自然や景色の美しさを詠んだ作品が多く寄せられた気がします。不安の多い時代の節目に、心を立て直すための静かな力を与えてくれる作品を選ぶことができ、うれしいです。

引力のふしぎをベッドより試し大丈夫今日も地球であるよ

暁に鉛筆あまた尖らせて夏草を刈るように書き出す

全作品を名前を伏せて印刷し、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定いたしました。入選作品欄は都道府県別に掲載いたしました。

NHK学園鎌倉市短歌大会大賞

父としか見ていなかったあなたにも家族捨てたき日もあったのか

山口県

山縣

満里子

鼻鳴らし流鏑馬の馬戻りゆくの中せざりし武将を乗せて

神奈川県

小原裕光

△題詠「山」▽

焼印の焦げのにほひのあたらしく明日より杖を売る登山口

愛知県

清水良郎

鎌倉市長賞

山ほどの波をボードで越えてきた女を婆と呼ぶのかあなた

兵庫県
高田 時子

NHK横浜放送局長賞

ロボットに負けないだろう我らには涙をながす本能がある

東京都
新美 喜代男

大下一真選

★特選

子供らの素読の声が風となる閑谷学校校楷の木
高し

熊本県 小川道子

庶民の学校として建てられた閑谷学校。その講堂で素読をするのは近在の生徒達か。庭に立つ楷の木は一点一画を正確に書く楷書に因むという。歴史を通して素直に育っていく子らに期待したくなる歌。

鼻鳴らし流鏑馬の馬戻りゆく的中せざりし武
将を乗せて

神奈川県 小原裕光

流鏑馬の勇壮な姿が歌われることは多いが、これは走り終えたあとの姿をリアルに描く。脚光を浴びない馬だつて真剣に走つたのだ。よくやったとたたえてあげたくなるではないか。

題詠「山」

焼印の焦げのにはひのあたらしく明日より杖
を売る登山口

愛知県 清水良郎

「明日より杖を売る」というのは、山開きの前日だろうか。多少の高揚感もまじえて、人間のそこはかとない営みが歌われている。殊に上三句のゆるみのない文体と嗅覚に訴える技法が秀逸。

★秀作

縁側に青梅漬けしガラス瓶父母いた夏の木洩れ日映す

東京 中西京子

「たたいま」を「今日は」に変え玄関を入り来る娘は赤子抱きて

神奈川県 水谷真知子

忘却は誓ふことなく訪づれぬなぜに出でこぬあの人の名が

神奈川県 柏崎忍

我が家には蛇が一びきいるらしい毎朝見つけるバジヤマのぬけ殻

神奈川県 八幡美佐子

見付けたる補聴器付ければ立ちどころ世は騒しき浮世とはなる

山梨 宮坂延雄

夕映えにキャベツ摘み取る人はみな畑にふかく頭をたれる

静岡 大庭拓郎

菜の花の触れ合う如く校門へ黄色い帽子吸い込まれゆく

愛知 加納金子

三日分の一合の米とぐ夕べ日脚は少し春めいてゐる

愛知 宮岡弥栄子

おい雲夫の介護はしんどいと喚いていいか泣いてもいいか

兵庫県 秋田由貴子

「ひいばあちゃん麻疹はしかをしたの」と尋ねられ記憶はジュラ紀まで遡る

岡山 大武千鶴子

父としか見ていなかったあなたにも家族捨てたき日もあったのか

山口 山縣満里子

校庭で遊ぶ少女らひらひらと隣家の窓に時おり映る

長崎 岩永ツユ子

題詠「山」

山の上にもまた山があるヒマラヤのマチャプチャレの峰雲を突き抜く
六軒に十一人の老の村山に抱かれ山に生かさる

青森 木立徹
福島 新井田美佐子

女神なら佐保姫が好きその息の淡く色づく山桜が好き

千葉 毘舍利愛子

鎌倉の山ゆくトレイルランナーに半僧坊の天狗も混じる

神奈川県 小笹岐美子

箱根路の給水係の花道は伴走のみの五十メートル

神奈川県 佐藤恵子

袖のなか伐り残したる山桜 礼過分なりこの花明かり

石川 室木正武

「春米」とふ山上にある過疎の村春は峠を登りてゆけり

兵庫県 西村徹

山ほどの波をボードで越えてきた女を婆と呼ぶのかあなた

兵庫県 高田時子

★佳作

家に鍵かけることないという村を包むがごとく菜の花が咲く
 鳥たちの囀り聞きたし九十二母が施設に入らぬ理由
 追ひかけて夕陽の下に滑り込みわたなかに立つサーファーひとり
 戦争は目にはさやかに見えねども驚くほどの排外の風
 机上には(大人のぬり絵)仕上げられことさら母はふじいろが好き
 好きな本「人間失格三回読んだ」と言いたる中一の孫
 ことごとく枝葉伐られし鈴掛の拳をにぎりしめること立つ
 寝る時になんどもなんども読まれた絵本がすべて売られてゆきぬ
 撞く鐘の余韻の中にカラス鳴く声が聞こえる深夜のラジオ
 孫娘魚になりたいなどといふ魚の哀しみ知る由もなく
 春めきて「ジイジバアバ」と幼子の呼びかける声近くに聞こゆ
 八十年のわれと雛ひなの歲月や胡粉の剥げしほそき鼻筋
 けふなさむとおもひしことをなさぬともあすなすことはあしたおもはむ
 御上おかみより次々届く祝受け百歳なんて他人事ひとことみたい
 「善光寺鐘楼最中」食みたれば鐘が鳴るなり秋の夕暮
 心愛みあ、結愛ゆあと呼ばれし初めは抱かれけむふつくら温きたまごのやうに
 地吹雪にまみれ営業せしこともこの閑職に至らん喜劇
 水買って飲んでる人はいなかった林檎の詩の流行った時代
 昨日より重く垂れたる雪雲がシールのごとく腰にはりつく
 待たれつつ咲くのもなく惜しまれて散るのでもなし大根の花

青森 種市 要司
 岩手 菊池 陽
 茨城 下田尾三乃
 栃木 野中 康弘
 埼玉 古屋 冴子
 千葉 森 順子
 東京 深野 光子
 東京 中村 孝子
 東京 服部 敏子
 東京 栄本 昌子
 神奈川 見山れい子
 神奈川 平塚 恵子
 神奈川 坪井 睦彦
 福井 小林 幸枝
 長野 柴田 康代
 長野 井上 孝行
 愛知 長尾 幹也
 兵庫 藤田 純乃
 鳥根 田中 勝美
 岡山 岡田 耕平

針山に潜みし針の先に触れ鮮やかな血の盛り上がりたり
 その棘に刺され続けて十七年実生の柚子に実の一つ生る
 貨物列車をいつまでも見てたこの孫にどうやら好きな人できたらしい
 ドラえもんのエプロン着れば園児らが寄りて四次元ポケット探る
 七草粥今年も元気になるように腹八分までおいしく食べる

題詠「山」

山菜が豊富と友はほほえみて僻地転勤の夫に従きゆく
 馬に乗りふたつ山越え見も知らぬ男に嫁ぐを祖母は語りき
 山鳩の声に目覚めしこの朝おさなの足を腹より外す
 山の上に並ぶ風車をまわすのは山八割の村を吹く風
 福島の山育ちなる亡き夫が自慢していた草駄天走り
 根府川の急な山道のぼるバス傾きながら海を見せたり
 家持の像に並びて立山を見ればうらうら春の陽照れる
 田の神を吐き出しながらやはらかく山は春着をまとひはじめ
 春一番吹く稲村に波乗りの遠き富士峰滑ること立つ
 東京の葛飾に育ち寅さんも山も知らない少女であった
 朝空にほら貝の音透き通る羽黒の山に芽吹きは近し
 イヨカンが山の畑に落ちている不思議な国の金貨のように
 山の価値書庫の誰かの全集の一冊に似て誰も気付かぬ
 鉄球に打ち砕かれし山荘は木端微塵の思想の砦
 山里の廃屋と見えし縁側に白菜二株干さるる秋日

青森 小山田信子
 岩手 佐藤 政勝
 宮城 朝長スミエ
 福島 深谷 京子
 埼玉 矢内とき子
 東京 高橋 澄夫
 東京 栗原 良子
 神奈川 山田 欣一
 神奈川 井手 頼
 神奈川 阿部 容子
 愛知 戸澤三三子
 愛知 笠井 忠政
 和歌山 龍田 早苗
 高知 池知さつき
 福岡 飯田 俊子

尾崎左永子 選

★特選

「ただ今」と無人の部屋に声かける僅かに嬉しきことありし日に

秋田県 菊地 順子

普通一般の生活者の日常、その中の現在の状況と心情が、短いことばの中によく表現されている。本来なら喜んでくれるはずの対話者の存在が無くなっている欠落感が、さりげなくにじむ。

ロボットに負けないだろう我らには涙をながす本能がある

東京都 新美 喜代男

世界全体が人工的創造物に圧倒されてゆく世相。その中で、人間が人間らしい特性を維持して行くのは難しいが、しかし、人間には器械に占領されない本能、感情がある。簡潔にその辺を表現した。

題詠「山」

馬に乗りふたつ山越え見も知らぬ男に嫁ぐを

祖母は語りき

岩手県 佐藤 政勝

馬の背に揺られ揺られて他の村に嫁いでゆく花嫁。現代にはもう無縁な情景だが、それを実際の体験として語る祖母。たぶん結果は幸せであったに違いない思い出話を、短い中によくまとめてある。

★秀作

子のごとく野菜苗にも個性あり素直なるもの手を焼かすもの
 暁暗の病室へやに入り来し初日の出鬨病開始の点滴光る

福島 新井田美佐子

自動ドアの開かない時は影のみがするりと抜けて我を待つてる
 八十年のわれと雛ひひなの歳月や胡粉の剥げしほそき鼻筋

栃木 齊藤 宏壽

やわらかく話かければやわらかく言葉返りて夫はやまびこ
 菜の花の触れ合う如く校門へ黄色い帽子吸い込まれゆく

群馬 清水 静子

古書店の奥の小机洪柿のやうな店主の眼鏡が光る

長野 塩沢 信子

みつけれないかくれんぼ 又一人記憶の中の人となりゆく
 待たれつつ咲くのもなく惜しまれて散るのでもなし大根の花

三重 伊藤 石英

父としか見ていなかたあなたにも家族捨てたき日もあつたのか
 たこあげも羽根つく音もなき過疎の村をまるごと日差しが抱く

大阪 海老 美幸

ライバルを後へ後へと置き去りて風の子となり駈けゆく少女

岡山 岡田 耕平

山に沿うゆるき曲線田植機は水の光に早苗置きゆく
 人生は山あり谷あり今吾は谷を歩みてゐるのだらうか

山口 山縣満里子

山肌はうすむらさきに煙らいて命ひとつと思ふこの朝
 密談と言はず「談かたひ山」と言ふ陽に照る紅葉の峰見はるかす

山口 恵子

早春の衣張きぬばり山の山すそに生ふる野芹のいぶきを摘めり
 残りたる毛糸の山はひざかけに編みて課題の一つを終えぬ

神奈川 高島 憲子

焼印の焦げのほひのあたらしく明日より杖を売る登山口
 右払い少し伸びたる心地して大文字山に春は来たりぬ

神奈川 大久保暁枝

愛知 江崎ヤヨヒ

愛知 清水 良郎

京都 福西 直美

題詠「山」

秋田 鈴木 仁

神奈川 島 晃子

神奈川 山口 恵子

神奈川 山口 恵子

神奈川 高島 憲子

愛知 江崎ヤヨヒ

愛知 清水 良郎

京都 福西 直美

★佳作

手袋をどこかに落とし日が暮れて頭蓋の底まで冷えてゆく夜
 青森 木立 徹
 老衰の園のキリンよ疾走の夢は捨てずにいられたろうか
 福島 遠坂 洋子
 そろそろと柔き重みを抱き取ればちごあまやかに腕に温もる
 福島 畑中 和子
 妣の名の「よね」と筆にて書かれたるくじら尺みつく簞笥の間
 茨城 児矢野雅恵
 僧の足袋白く光りて過ぎりゆく音なき音に夫七回忌
 茨城 築田 いと
 拍動のやうにバルサー光りをかりに星雲のはるかなる色
 埼玉 長野 徑子
 日々の修羅書き散らしたる吾が日記性懲りもなく又書き始む
 千葉 菅谷 貞夫
 凍て土を掘りて採りきし大根の切り口の白の眩しかりけり
 千葉 高仲 一郎
 病室に夫を残して帰り来ぬひとり聞きいる夜の雨音
 千葉 古市安紀子
 明星を仰ぐが如くに下弦の月雪止みし空に輝きを放つ
 千葉 岩崎 勝
 胸に組む母の手白し戦中戦後七人の子を育てくれし手
 神奈川 松原 佳江
 兄からの里芋の荷は伊那新聞短歌の欄に包まれて来し
 神奈川 東海林千恵
 卒業が訣れと知らずふるさとを巣立つ若きは前だけを見て
 神奈川 横山美智子
 鼻鳴らし流鏑馬の馬戻りゆくの中せざりし武将を乗せて
 神奈川 小原 裕光
 産みの苦を終えたる乳牛が仔に寄りて舌で愛撫の果てなくつづく
 石川 堀 久美子
 御上より次々届く祝受け百歳なんて他人事みたい
 福井 小林 幸枝
 天領と言はれし土地に嫁ぎ来て天領とふ名の地酒に馴染む
 岐阜 横山 清子
 「さん」付けて呼びたる夫の魂胆を探りてしばし聞こえぬふりす
 静岡 飯田倭文子
 ひと声を宙に鋭くひびかせて伊良湖岬をサシバが渡る
 愛知 中村佐世子
 手を伸ばし掴みたくなる太陽に似た存在があなただろうか
 三重 小林 寛久

題詠「山」

補聴器をはずせば無音の世界なりなれど安らぐ一人の部屋に
 兵庫 坂下小夜子
 全身に振動伝へチェンソーが木の歳月を通過してゆく
 山口 森田アヤ子
 川風に揺るる小舟に綱を引く老いの手元に跳ねるしろうを
 愛媛 前田 充
 黙々と宇宙の音に傾ぶきぬ野辺山原のパラポラアンテナ
 埼玉 長野 徑子
 福島山の山育ちなる亡き夫が自慢していた草駄天走り
 埼玉 矢内とき子
 山盛りのポップコーンの皿の底ぼくたちはまだ夢をみている
 千葉 ミサカクシラ
 戦跡をあまた残して美ら海にゆがみしままの伊江島城山
 東京 江里口紀子
 父の積みし藁の山より湯気が立つふる里寒き冬の朝には
 神奈川 杉山 藤子
 山の端に昇る朝日が一瞬に家の中迄深く射し入る
 富山 清水 昭子
 山里に巡回文庫のスピーカー返却の本子は胸に抱く
 福井 永田 弘子
 姨捨の山より下る雪解けの水は棚田に春を運び来
 長野 高野 秀子
 月あかり充つる山気の堂に座し若き僧侶の勤行を聞く
 愛知 今泉 一夫
 山々の若葉の中にほの白く咲く山桜のやうに生きたい
 三重 椋本 明美
 日本海の冬の海鳴り地を這ひて山里の樹をふるはせてをり
 鳥取 佐々木順子
 不揃いのトマトのかご盛り一山を購い急ぐ夕映えの道
 山口 藤本 征子
 孤独なる校長職よ風寒き屋上に見る落日の富士
 徳島 喜島 成幸
 山峡を過る窓の辺すれすれの若竹に車内は青く翳れり
 大分 羽田野とみ
 襟あしを合わせ鏡に映すと澄める湖面の富士の稜線
 大分 佐世 弘重

永田 和宏 選

★特選

「ただいま」を「今日は」に変え玄関を入り
来る娘は赤子抱きて

神奈川県 水谷 真知子

帰省するときは決まって「ただいま」だった娘が、子どもができて、無意識に「こんにちほ」と言つて家に入つてくるようになった。自分の居場所の意識が変わつたのである。親としては寂しいことだがこれでいいのだとも。

父としか見ていなかったあなたにも家族捨て
たき日もあつたのか

山口県 山縣 満里子

「あなた」を「父としか見ていなかった」ということにある日、愕然と気づく。「あなた」にも、一人の男として家を捨てたいと思つたことがあつたことに気づいたのは、すなわち「私」が人間として成長したということ。

題詠「山」

女性よりゴリラの方が優しいか山極壽一に
こつそり聞こう

福岡県 松本 千恵乃

なんとも愉快的な歌だ。山極さんはゴリラの専門家にして京大総長。ゴリラの権威に、ゴリラか女性かどっちが優しいのかと聞いてみたいという。作者にとつて女性が手強い存在であることは言わずともわかるところが面白い。

★秀作

名前は言へますが住所は言へませんとふ人の さまよふ日暮
今一度あなたのとなりできれいだと言つてみたい今日の夕焼
鎌倉は雨だつたのか大仏と写る傘の娘逝きて幾年
亡き父へ香典の次は年賀状 企業は大よそのようなもの
ストープのやかんの湯気がつぶやきに聞こえる夜は魔物になれる
施餓鬼会の御堂の外の蟬時雨僧の読経の途切れて聞ゆ
暮じまひ済みし更地に桶の籬外れたやうな姉弟四人
スマホ持たぬ世に人ら「お」と「様」を添へて仰ぎき日と月と星
時がやさしく過ぎてゆく君となら言葉をさがす必要もなく
江ノ電に置き去りにしたおもいでを迎えに行こうか、この夏あたり
おい雲夫の介護はしんどいと喚いていいか泣いてもいいか
全身に振動伝へチェンソーが木の歳月を通過してゆく

題詠「山」

「トマの耳」「オキの耳」とう二峰ある谷川岳の頂に立つ
空磨き息吹きかけて山磨く最後はキュツキュとわが鬚磨く
峠とか山を越すとか病室のひそひそ話漏れくる廊下
虎狼とはならねど久しく身の内に飼ひ馴らしたるモノ山月に解く
すきな音テントのファスナーあける音ひんやりとした冷たい空気
右払い少し伸びたる心地して大文字山に春は来たりぬ
なんちやない山より大きな猪は出ぬ祖父の口癖今孫に言う
山頂の写真はいつも満面の笑みの夫と疲れた吾と

宮城	大和	昭彦
千葉	松村	君代
千葉	大内はる代	
神奈川	おのめぐみ	
山梨	加賀美	公
長野	傳田	房子
長野	佐々木	桂子
静岡	友井七実子	
愛知	添島貴美代	
大阪	黒木	淳子
兵庫	秋田由貴子	
山口	森田アヤ子	
群馬	松村	蔚
埼玉	武井	猛
千葉	毘舍利道弘	
千葉	藤井	正子
神奈川	八幡	龍
京都	福西	直美
岡山	山口	洋子
山口	山縣	満里子

★佳作

我をまだ叱つてくれる者がゐる伸し棒さばき生蕎麦も打ちて	青森	佐藤 悠一
家に鍵かけることないという村を包むがごとく菜の花が咲く	青森	種市 要司
消防車を見に行く母子がふと離れ陽なたを踏みに行く男の子	埼玉	岡田 美幸
浮標ひとつ港の中を行き来して冬のかもめを遊ばせてゐる	千葉	安井 三緒
雪つもる馬門温泉和紙色南天の赤あざやかなりし	千葉	松本勢津子
寝る時になんどもなんども読まされた絵本がすべて売られてゆきぬ	東京	中村 孝子
宿借りの貝になりそう高層のエレベーターにひとり浮遊す	東京	栗原 良子
豊かなる乳房あらはに江ノ電の弁財天は琵琶を奏でる	神奈川	原田亜璃沙
駅伝の選手の到着待っている 渡邊ベーカーリーのシチューを食べ	神奈川	白井 慶子
繰返しベートーヴェンの盤回す すぐらん通り喫茶店音楽	神奈川	金子 裕子
マイネームイズオバアチャンと言うのよと幼ながそつと教えてくれた	神奈川	石黒 雅子
鼻鳴らし流鏑馬の馬戻りゆく的中せざりし武将を乗せて	神奈川	小原 裕光
無言にて人を呼吸する回転ドア喜怒哀楽の無数の吐息	富山	堀田 節子
雪虫にあしたは雪だと言ったのはあれはたしか十六の時	岐阜	安江 弘行
天領と言はれし土地に嫁ぎ来て天領とふ名の地酒に馴染む	岐阜	横山 清子
「水」とある瓦戴き丘の上の駐輪場が冬空にたつ	岐阜	三田村広隆
「さん」付けて呼びたる夫の魂胆を探りてしばし聞こえぬふりす	静岡	飯田俊文子
一点を見つめて暗記の最中なり高校生の背に青き海原	愛知	瀧田美保子
5センチの蝸牛の歩むスピードで辺野古の海は埋めたてられる	愛知	伊藤貴久代
読みたき本みつからぬ書架ゆききするかつては港でありし図書館	兵庫	内田さやか

うれしくて親は「愛」の字つけたはず結愛ちゃんかなし心愛ちゃんかなし	和歌山	立川 唱寛
私はねあなたのロボットではないと夫にキッパリ大寒に入る	和歌山	中嶋 陽美
江ノ電の車窓の海が甦るあなたははずと嘘つかぬひと	和歌山	木村いく子
「食へてるか、さびしくないか」三月ぶりに帰省せし息子は靴脱ぎながら	広島	金尾 洵子
虫好きの五歳が描きしバッタの絵は飛び立つ構えて夏を待ちおり	愛媛	青野 千春
—— 題詠「山」 ——		
雪解水とどろく峡の揺れる橋水に濡れたるその橋渡る	宮城	白井美沙子
柚山にワラビ摘みつつ眺むるは芭蕉歩みし山刀伐峠	山形	伊藤 知雄
年古りし茂吉の住み居し書屋より白き鳥海山遙かに仰ぐ	山形	八鍬キクヨ
山宿のランプの灯る露天風呂ささくっていた体ほぐれる	茨城	阿久津利江
山裾の戦車製造半地下は洞窟酒蔵となりて生きてる	栃木	小池 芳子
ストーブの煙がゆるゆる上る見ゆ山家暮らしの友は在宅	栃木	齊藤 宏壽
パスポートの使ひをさめに来し旅にシエラ・ネバダの山脈光る	神奈川	鎌田 澄子
父の積みし藁の山より湯気が立つふる里寒き冬の朝には	神奈川	杉山 藤子
必修の近代茂吉大教室山根先生三次市の人	新潟	七里 松枝
声届く距離を保ちて夫と吾即かず離れず山菜の山	富山	源通ゆきみ
今日もまたいつもの書齋に座つてる量子化学や寺山修司	滋賀	田中 新一
もののふが月見て泣きしはこの月か月山富田に夕闇せまる	兵庫	松本 文雄
野の風を銜へて揚がる出世風城山公園人声に湧く	愛媛	井上由美子
境界をめぐり諍ひし人々の絶えて荒れゆくふるさとの山	愛媛	三島誠以知
新雪の穂高山頂めざしゆくドローンは凍る大岩壁を超ゆ	福岡	石井 博幸

東直子選

★特選

凍て土を掘りて採りきし大根の切り口の白の眩しかりけり

千葉県 高仲 一郎

苛酷な「凍て土」の中で耐えて生きてきた「大根」への憧憬が感じられる点が新鮮。「眩し」には、その気持ちを表すと共に、暗い「凍て土」から地上に出てきた「大根」の感覚も代弁している。

調律の打鍵のようになぎざはしをぐつと踏み込む入學の子は

青森県 佐々木 絵理子

ピアノの調律の打鍵は、繊細な音の差異を聞き分けるため、慎重かつ確実に行われる。それを、入學したばかりの子が、ひたむきに一步を踏み出す様子になぞらえた。その子にエールを送る心が真っ直ぐ伝わる。

題詠「山」

山ほどの波をボードで越えてきた女を婆と呼ぶのかあなた

兵庫県 高田 時子

様々な苦勞をのりこえてきたことを、たった一枚のボードで波を越える姿で描き、勇ましい。年齢を重ねた女性をいくくり「婆」と呼び、敬意を忘れている風潮に対する批評性を含み、清々しい。

★秀作

車イスの弟はまた楽しみのひとつ諦めぬ自販機遠し

青森 木村 茂子

わが歌を少女趣味と言ひし人今も元気に歌作りているか

青森 西館 礼子

空き席を「こいいですか」と聞きしことも今日会話した一人に数えし

栃木 宮田とき子

耳ふたつ海月のように遊ばせて岩畳ゆく 古きひかり差す

埼玉 古谷真利子

軒下に干したるそばから凍りつく二人のシャツは袖をからめて

埼玉 武井 猛

鎌倉の処刑場跡の六地藏それぞれのお顔異なりてをり

千葉 福地 公子

スーパリーのカートにもたれる老人のうしろ姿は空蟬に似る

東京 新美喜代男

目覚めても酔いが覚めない体内を空ろな風がたゆたつている

神奈川 松本 秀夫

副作用は折り込み済みとさらり言ふ癌の娘唄み新年祝ふ

神奈川 池田 佳子

葉を落とし切り絵のように尖りたる秀つ枝の透きて茜雲みゆ

山口 清木 幸

むかしむかし問はず語りの祖父の声思ひ出づるも「人こそ鬼ぞ」

熊本 船間 和子

独り居のころ弱まる夕さらに強氣入りきて「お前が決めた」

大分 中島 絃子

題詠「山」

山が山を抱き合ふごと重なれる母の故郷に雪降り始む

青森 大野あつ子

黙々と宇宙の音に傾ぶきぬ野辺山原のバラボラアンテナ

埼玉 長野 径子

山盛りのポップコーンの皿の底ぼくたちはまだ夢をみている

千葉 ミラサカシラ

一年中半袖シャツで過ごしてた西山君の結婚写真

東京 山口 信子

指先で子の体温を探しつつ砂山に細いトンネルを掘る

神奈川 川崎 由美

山里に巡回文庫のスピーカー返却の本子は胸に抱く

福井 永田 弘子

登り来て赴任学校に着きし時はたと日は落ち山迫りたり

静岡 西田 房子

山ひとつ視界から消ゆセメントになりて国土を支えおるらむ

愛媛 宇和上 正

★佳作

トントンをねだる幼の小さき背寝息立つまでわれのとなんとん
 目だけ出ている大きなマスクどこの人かと鏡の人に問う吾
 さまざまの夜明け見て来し七里ヶ浜三千里とふ子らの国まで
 消防車を見に行く母子がふと離れ陽なたを踏みに行く男の子
 幾万のひな人形におどろきつホームにもどりみなと語りて
 こんなところに芽を出す標法事に会う親類はみな代替りして
 猫だけの夜の道あり我れだけの歌のみちにはらうばいの咲く
 「遠山」の名は残さず傷のこす成田開港四十周年
 寝る時になんどもなんども読まされた絵本がすべて売られてゆきぬ
 愛着を断ち切り五足のハイヒール想ひ出だけが背のびしてゐる
 降りさうで降らぬ雪空揺さぶりてヒマラヤ杉は苑ぬきむ出る
 朝の日の草に散らばる雀らの一瞬ずらして左右に発ちたり
 八十年のわれと雛の歳月や胡粉の剥げしほそき鼻筋
 骨ふとき母の遺骨の清きさま長く病みたる果ての安寧
 白蝶のふはりと窓をとほり過ぐ亡き母の小さき春のまぼろし
 田植終えカラス下りたち白鷺が交互に集い閉幕が始まり
 四十に近い娘は母となり魂さえも子に吸わせ居り
 「あけぐち」と闘い疲れハサミにてハムを取り出すもう日は暮れる
 我のいた席の埋まらぬままのバス見送れば色あせる夕空
 地震など此処へは来ないと思つたブルーシートの海に溺れる

山形 富樫 桂子
 福島 大津 勇治
 茨城 石塚 明夫
 埼玉 岡田 美幸
 埼玉 三木 くみ
 千葉 正治 伸子
 千葉 高伸 一郎
 千葉 高伸 一郎
 千葉 高伸 一郎
 東京 中村 孝子
 東京 中村 孝子
 東京 丸島 和子
 東京 丸島 和子
 神奈川 鈴木美志子
 神奈川 鈴木美志子
 神奈川 平塚 恵子
 神奈川 平塚 恵子
 神奈川 遠藤千恵子
 神奈川 遠藤千恵子
 新潟 橋詰 利夫
 新潟 橋詰 利夫
 岐阜 川瀬 敏枝
 岐阜 川瀬 敏枝
 愛知 島田久美子
 愛知 島田久美子
 京都 中村 愛
 京都 中村 愛
 大阪 武藤 小夜
 大阪 武藤 小夜

炎天下 蓆を屋根の乳母車泣かず育ちし娘は校長となる
 わが犬はけふもこれから待つばかり足音もどるを耳すませつつ
 砂浜に打ち棄てられし椅子にかけ尖るころをなだめて歌ふ
 「われ無実」と言い切る人強靱な心臓なれば待ち人のドナーとなられ
 題詠「山」

「山に登れる体で生まれてきたい」来世の妻靴を残せり
 爺爺と孫の呼ぶごと山雀ら餌をねだりをり雪止みし朝
 草深き山道行けば顎欠ける野仏前に飴玉三つ
 縛られても巻かぬ白菜のびやかに山の畑に春の陽を浴ぶ
 満山の翠を映して玉眼は潤みあはかな時頼の像
 一尾根の樹氷に当たる初日の出老いの儂き火の灯ること
 砂走りザザーザザーと滑り降り砂まみれの顔みなで笑ひ合ふ
 これをもて最後と老いし夫は言い甲斐の北風あびて戻り来
 息子のために母が守りし杉山は鬱然といまだふるさとに在り
 木曾谷の旅にお前は言つたつけ山の向かうは「ほんと青い」と
 俯瞰すれば小さな盆地 ほらあれが私の生家山裾にある
 山田田山山中山小山大山檜山杉山大和は山国
 やまもの木を見し母が山桃を食べし昔を語り出した
 大雨も懐に入れ滋雨として大台ヶ原山開きは晴
 山形の小さき雪玉投げ合ひて幼返りの妻と戯る

福島 大津 勇治
 栃木 齊藤 宏壽
 千葉 八木由美子
 千葉 八木由美子
 東京 門間 徹子
 東京 門間 徹子
 神奈川 田崎 意匠
 神奈川 田崎 意匠
 神奈川 守安 雄介
 神奈川 守安 雄介
 新潟 松浦 光子
 新潟 松浦 光子
 山梨 宮坂 延雄
 山梨 宮坂 延雄
 愛知 梶村 京子
 愛知 梶村 京子
 愛知 宮岡弥栄子
 愛知 宮岡弥栄子
 京都 長尾 律子
 京都 長尾 律子
 奈良 宮本 郁江
 奈良 宮本 郁江
 大分 佐藤 信二
 大分 佐藤 信二

入選

北海道

雪かきの手を止めてふと見入る白、白い白い雪色

卯年の生まれ北条義時に守られて幕府の遺産鎌倉ぞ栄え

「山ん根のさつちゃんかい」と声かけられ頷く二年ぶりのふる里

蕎麦をゆで畑に行きてネギを抜くなげなき日々を重ねいきおり

……………題詠……………

鳥には鳥の家路 ひしめきて山ふところの罫指すらし

大倉山シャンツェへとつづく道の辺にどんぐりを踏むかたき音鳴り

雪虫の飛び交うタペラジオより大雪山の初冠雪聞く

鎌倉に山を訪ねむ巨福より瑞鹿・亀谷・金宝・稲荷

真冬日のしづかな夜にくむ酒の酔ひの山場にこの日をしまふ

山津波又山津波山津波ブラックアウト満天の星

心不全救われし砂川の病窓に落日に美しピンネシリ山

青森県

おみやげの『ムンクの叫び』ポケットに帰途は奇しくも夕映えを浴ぶ

たどたと「ママ」と呼びたる吾子のご多喜び聞きし耳も老いたり

笑ふ字の連風ひっぱり引きつられのけぞる浜に歓声揚る

そわそわとスタートラインに立ちている幼のころそつと分け合う

貫禄も威厳も無くて子や孫の機嫌に生きる平成の爺われ

この夏のひかりがまつすぐ届く朝ポケットに風をまるめてしまふ

……………題詠……………

四方山の麓にひそと建ち並ぶふるさとの村人氣見当たらず

頂上と思ひし先に山があることを知りたり加賀の白山

奥山に咲く一輪の花なりとおみな讃へて娶りしと言ふ

城跡に遠望すれば白銀の八甲田山雪晴れに立つ

岩手県

乳飲み児と満州よりの引き揚げを老女は眼するどく語る

はるばると来て潮騒を聞く夕べ津軽の海に灯のともりけり

節分のメールに乗りて鬼来る招福わらべの小さやかなり

……………題詠……………

走りゆく窓の外には栗駒山くりこまのまとひし雲も晴れつつ過ぎぬ

宮城県

激安の激をタマゴに押し付けて今朝も真つ赤なチラシがとどく

疎開の子空襲の恐さ知らずしてみちのくの山に働き老いる

背伸びして見たる仙台空襲の燃ゆる火未だ眼に残る

手持ち無沙汰もときにはよろし空を翔ぶ鳶の自在にこころ遊ばす

連休が近づくとつれ広告の花と野菜は鮮やかとなり

……………題詠……………

寡黙なる夫に似たる息子と並び山峡の沼に鮎鮒を釣る

黄に照らふシヨベルカー今動き出しそのシヨベル山に突きささりたり

秋田県

除雪車は根雪の坂に春来よと雪壁立ててゆつくり昇る

遠く近く栗鼠の横切る谷戸の道ちさき家へと小包み運ぶ

三 智

高本 智宏

樋口 幸子

吉田この実

笹島 和子

長瀬 明子

仁尾 泰子

西井 健治

幻 尽

藤林 正則

山上 淑子

梅村 久子

大野あつ子

遠瀬 信子

平井 軍治

福士 謙二

星野 綾香

鎌田 保

佐々木冴美

西館 礼子

三浦 敬

佐藤 政勝

芳賀 越夫

休石庄太郎

佐々木政子

木村 譲

白石 治男

菅原 孝俊

千葉 直美

角田 正雄

千葉 直美

大和 昭彦

下村 清

鈴木 仁

.....題詠.....

擦違いぎまに挨拶行き来する山の出会いの刹那の深し
山いっばい銀杏もみじを散らす夢果たせぬままに八十路となりぬ

山形県
娘の目盗んで孫にキスをするパンとミルクとかぼちゃのにおい
年賀状欠かさぬ父の戦友にその死を告げる手紙書きたり

山形県
山茶花の赤き花びら裏畑に散り敷く見つつ母を思ひぬ
京節のご詠歌聴きて古の巡礼偈ぶ雪降る夕べ

療法士が「すぐ戻るよ」と離るるを不安気な老女の片手が追う
雨上り青空覗く冬の朝甕の水は弛みて動く

一冊の歌集しずかに閉じたればあじさいの花のみちる夕空
梅三個の茂吉の描きし絵皿には羊かん盛りて朝茶の旨し

.....題詠.....

鶯の初鳴き聴きて山寺の奥の院への参道登る
こまくさの平に駒草群れをりて山の風にし震ふ朱花

ジーンズとスニーカーに來し能役者山伏演ずる舞台上に立てり
短歌一首和紙に書くとき越前の山峡の村へわれは旅する

福島県
熟すべき事務のごとくに締切りを守りて送る短歌十首を
いくさ時の阿鼻叫喚の傷埋めて肌の皴脈景勝を生む

遺影の子の口にあんこを塗りしとう友のはがきに鯉幟泳ぐ
病床の母の掠れた「おはよう」が日ごと弱りて口元を見る

裏日本豪雪気にしつ鎌倉のうらら陽あびて歴史を尋ぬ
お茶を飲みまんじゅう一個食べながら辺野古の海のニュース見ている

菜の花色のブラウスマとう予報士が大雪警報くり返し告ぐ
橋本 愛子

濯ぎ物ひとつ干すにも気づかないぬマンション住まいの娘の家に來て
水野 滋子

筈のように育ちし孫達の肩越しに見る桜菜の花
米山 睦子

.....題詠.....

杉山のうす暗がりをひたひたと吾の足音ききつつ歩む
菊池 重堅

立山の空をも映しダム静か犠牲となりし人の碑
田中 英敏

気がつけばいつもと違う帰り道山のお猿のいたずらしい
八谷 温子

震災により八年を駆け故郷の山々つらぬく復興道路
米山 睦子

茨城県
後継ぎのいない田畑は広々と静かに静かに春の雪降る
阿久津利江

補聴器を付け眼鏡かけマスクかけ聞こえぬ耳でもなくてはならぬ
飯田 初江

ささらぎの霊柩車ゆく雪道にひとりの老女掌あわせ拌む
大熊佳世子

産み月の娘アツプルバイを焼く憂ひも包み込むやうにして
岡本 恵

肩寄せて灯籠流しを眺めし夜老母は我が手をそつと握りき
黒澤 初江

天地に満つる日本の春の氣を自在に切りて愛しむ燕
黒羽 千尋

兎らと乗るローカル線の窓近く菜の花ゆれる大きく揺れる
袖山 昌子

携帯に張りある友の声を聞くこの日初なる会話と言ひて
遠山 順子

真つ白に生きてくことを此の冬も教えてくれた雪よサヨナラ
西村 宗倫

牛乳にコーンフレークが揺れている心の均衡たもたれぬまま
平岡 通子

名を持たずほか何名様と呼ばれていて土手の土筆の数に驚く
松本 住江

生涯に名刺持たぬ吾の手に肩書き多き一枚重し
吉澤 光代

父の打ちし銅のおろし器におろしたる冬大根のいよよまろやか
和田山可扇

.....題詠.....

赤き実を塩からき実をほほばりき野山に遊ぶ子ら多きころ
石塚 明夫

くぐもりて鳴く山鳥のこゑきこゆ巢立ち促す宮居の木叢
つくば山の麓に住む娘一家水槽に楊貴妃とふメダカも泳ぐ
栃木県

下田尾三乃
吉澤 光代

群馬県

おにぎりともかんとポット手渡して雪の中発つ夫を見送る
洗ひ髪乾かしながら手鏡に少なくなりし髪を整ふ

相田 悌子

冬の陽をロゼット状の葉にうけて蒲公英の根はひそかに肥ゆる

小原 恵美

ありったけの窓明けはなち花びらを飛びつき飛びつく一年教室

小池 芳子

美しき海埋め立てこぼむ島人を遠くにおきてわれらの非力

河野 徳子

集会のざぶとんあまた敷かれしも各自の席はおのずと決まる

小林 博

毛糸帽まぶかに被りマフラーに首埋めて待つ五合目初日

齊藤 宏壽

蒸気吐く機関車のごと若きらが元朝未明の海浜走る

齊藤 宏壽

北風の中に白菜どんと座し尻たくましく着けどきを待つ

瀧田 聖子

裂帛の小鼓の音ふと消えて道成寺の舞台幕下りている

田崎百合子

「どちらでもない」を選びてあやふやな一生を吾は野と共にあり

松山 宏意

北風に背中おされて散歩するながなんでも八千歩まで

茂呂田 誠

こまごまと家事の段取りメールにて指示する妻は入院中

茂呂田 誠

……………題詠……………

山小屋の一夜に脚の痛みきえ檜の頂へハシゴを登る

押久保 準

裏山に木を刈りストーブを焚く冬は炎と夫と猫との会話

小原 恵美

富士山は大根畑によく似合ふ孤高にまつすぐころ傾けり

久保 澄子

三轟山七曲りある道行けばやぶの中からうぐいすの声

高橋 君子

きのふよりも雪の積みたる高原山母の病室にひとりながむる

高松三枝子

山の端に淡き満月残りいて霜の野面に朝日さし初む

瀧田 聖子

あかねさす山路に咲ふ紫のスマレは芭蕉の葎だらうか

野中 康弘

榎殻は塀より高き山となり僅かの風にも優しく飛べり

若色 恵

……………題詠……………

もしあの日御巢鷹山で果てなかつたら坂本九は今どんな歌手
米三合持ちて行きたる高原学校伊香保より徒歩で榛名山まで

天田 勝元

天高く里の山々静まりて炭焼く煙三つ四つ立つ

大塚とみこ

山ゆりのきんとんを煮るおふくろが台所にいた昭和の時代

斉藤 末廣

沈まないでと山辺のお日様おいかけた たった一つの戦後の光を

信澤智恵子

帰り道ぐんぐん迫る赤城山フロントガラスをキャンバスとして

松村 公子

友や師と赤城山とを恋ふ妻を転院させる余命ひと月

横山 房子

埼玉県

門付けの竹山ちくざんの指かじかむか あいや節のバチ目に浮ぶ冬

太田 裕子

伝えきれぬ漫画の音訳もどかく読み上げては聞きました入れ直す

笠原 吉江

ビルが立ち風が風押す狭き路地洗濯物の宙返りせり

栗原 弘雄

夢の中母にしたられ目覚めれば写真に向かい言い訳をする

坂田みつ江

日の本の島に棲み古るわが日々のさても脱ぎたき靴といふもの

鳥崎 征介

千年のとき経て今もファンのあり紫式部に伝へてみたき

新藤みどり

馬鈴薯の種薯を切る春眼をむさぼる如き芽を選りながら

鈴木 興山

鎌倉の小町の辻で仏法を激しく説きし人ぞ有りける

高瀬 忠興

病院における検査の終ふる身が台風一過の日差しに背のびす

岩壁に隙間も無しにびつしりとサハリンからの流水届く

笑みながら余命をきざむ弟よ今年は雛が箱から出ない

泥んこで帰りきし子は喜々とせりバケツ一杯のカエルの卵

四億年前の扉か冷凍のシーラカンスの顎を覗く

手のひらで押ししてしまえる風もなく書の進級を決める春くる

いつせいに手を上げ大路わたりゆく子らに集まる春のひざしは

鎌倉のみどりの小径にすれちがう弓の道着のポニーテール

……………題詠……………

初春の凜凜として山幾重車窓に添いて移りゆくなり

山をなす洗濯物をたたむ時おひさま匂う午後の陽だまり

ああ僕はやっと気づいたこの山がずっと背中を押してくれてた

またもとの山に戻りし千枚田所々に石垣残る

集中豪雨に根こそぎ崩れし蜜柑山ふもとに傾き実のなる木木あり

山津波濁流の中巨石を照らす稲光りそして朝が来た

沢の音聞こゆる山里寒ざむと暮れゆく村に鹿のひと声

山道に会う人の無し霧雨を小綬鶏あゆむ声濡らさずに

ポリビアの鉱山町の昼日中コカ中毒者路傍に打ち臥す

山中に人の悩みを聞くゆえか石の仏の右縁欠ける

千葉県

なえあらば白く小さきかさこそと鳴りてやあらむ教え娘の骨

庭に下り今朝の寒さの霜柱サクサクと踏む靴跡残し

故郷の炬燵恋しき如月の男体山は真つ白と聞く

杖二本つけば右足前に入る人気なき路地にあかき南天

高橋 京子

武井 猛

中門 和子

寺沢 文子

古谷眞利子

村上 文江

森 暁香

渡部 桂子

秋山 保子

碓井 恭子

大浦 敏道

尾堤 輝義

高橋 京子

橋口まさ子

原田 弘子

古谷眞利子

丸林 彬

村上 文江

青山通義雄

秋山 典子

石塚 スカ

今関 弘

引き揚げ船佐世保埠頭の灯を見詰む少年生きて七十年経る

水鉢の厚き水に一葉のみみじ潜みて輝き放つ

縁日の露店で喉を潤したラムネの泡に昭和が映る

己れのみ傷つきしがに振る舞いて帰り行く娘を「親」と成したし

寺社巡る修学旅行を無事終えし孫娘の土産の鳩サブレ食む

来世もこの地に生まれ歌を詠み大工の修業を続けてみたい

白樺の林を行けば清すがし両手を広げ深呼吸する

麦踏みに柞葉の母と行きたりし枯れ葉の小径は今も変はらじ

冬ざれの野によみがへる秘密基地の布団がはりの枯れ葉のほひ

「がんばらない生き方なんてあるわけない」八十路の友はポツリと言ひぬ

花びらを支えて芽吹きそめる頃花水木咲く街がおちつく

繊細に見えて時には大胆な心のごとき雲の行き交ふ

わが国とかわが土地なんて言うけれどみんなみんな地球の持ち物

わが町の並木を子鹿が跳ぬることスキップしてゆく春の少年

麵好きのわが食卓に米好きの妻の手料理 これが結婚

もらうのは幸せそれとも不幸せ先に座った人のぬくもり

由比ヶ浜の夜明けに動く人の影黙々として若布干しおり

ドバイなる砂漠に黄濃き夕日落ち余光の空に三日月の出づ

「空あり」の看板の立つ駐車場 見上げば確かに天空がある

春帽子ひらりと乗せたる自転車は江ノ電を追う軋みつつ追う

語らへば酌めばいつものふたりなり「なんくるないさ」出る頃ほろ酔ひ

枯葉散る山路をゆけば栗の毬朽ちかけて地に転がりてあり

……………題詠……………

ふゆさくら二輪みあげて錦屏山三百余年が我に問う「生命」

浮田 治

大島 悠子

葛岡 昭男

是松たまき

須賀登喜雄

鈴木造酒男

関口 靖子

高仲 一郎

高仲 一郎

永井 逸子

永井 孝雄

蓮間里恵子

毘舍利愛子

毘舍利愛子

毘舍利道弘

福川 敏機

細貝 節子

守田 靖

八木由美子

山崎 蓉子

山下 利子

山本 一成

市村 喜義

「もう来んぞー」と名付けられたる今藏院山は石路採りし山の頂上

井上 成子

うみかぜが巨大風車を吹き抜ける小山を透るかいほつのはつ

浮田 治

道の辺の地蔵の影のやわらかし木の芽ふくらむ房絵の里山

齊藤 愛子

淋しさをぎゅつと煮つめて温かさに変えてしまえる兄が山に居る

関口 靖子

笹粽の結びめ解けばにほひ顕つ笹山さやぐ石見相聞

高仲 一郎

リタイアのわれもああいふ感じかも天気よき日の午後のサル山

毘舎利道弘

年甲斐もなく大声で母呼べど山のこだまは戻り来ぬなり

福地 公子

来る年に願いのありて替げかえる東山ブルーの湖の絵に

牧野 紀子

カナカナの一つの声の透きとおる夜明けま近き山峡の湯に

宮尾 清美

城山といわれて居しが城は無く石垣もなくならかな丘

森田 満子

如月の朱欒の色なる地藏林 缶蹴りのこえ山彦となり

山崎 蓉子

淡き日に照れる宝登山臘梅は傾りに咲きてひよどり遊ぶ

山本 一成

東京都

車窓より夫は見てをり風立ちて千石原のゆるるすすきを

家泉美枝子

一人の日一人の部屋で一人居り一人づくめの五十路なるかな

榎戸 源茂

中空を見上げてみればかなしくも雲をきざみて電線多し

大西 文夫

猫のようにふり向いてみる冬の路地ひとり縄とびする子が見える

岡本 和子

千年の古木群れ立つ藪のなか祠あがめて米ひとつまみ

小川 亘

パソコンの闇なる底をまさぐりて操りぬるか操つらるるか

鬼澤 栄子

波立たぬ朝の鎌倉サーフィンの人多く浮く沖に向ひて

朝丘 清美

冷たい手の主治医その都度手指揉む診察前のルーティンワーク

貴山 浩美

高層に見下ろす波止場の春の陽に小さき人影ひとを曳きゆく

栗原 良子

地図帳に僅か十センチ子の住まう十勝は遠く雪ふりつきる

斉藤 恭子

朝まだき土手をすぎれば現れぬセブイレブンの光の船が

佐藤 智子

丸窓の若草色の売り家に白き表札掛かる春の日

志田 彰子

真すぐなる杉の林のなつかしさ森林限界過ぎて下れば

豊田 薫子

さくら咲く哲学の道歩みつつ李さんに聴けりサムスンのこと

柴田 慶子

大仏は美男におわすと聞きてより時折訪ね近づきける

鈴木 正作

星屑のやうにちらばる骨の屑余さず母と父拾ひ合ふ

曾根新五郎

窓開けて帰り来る娘の靴音か風の向うの夜の向うに

高橋 勇

電動ノコギリの音鳴り響く人手に渡る谷間の家

田中 弘子

階段の五段をのぼると膝痛む洗濯物が重すぎるのだ

田村佐知子

鎌倉に住めば住むほど歴史づく自慢のきみの実朝語り

中空 善彦

がん患者詰めし待合こはごと明かり一条すがる顔して

中空 善彦

通勤路にそばだつ楓の樹伐られしもわれは忘れずその風の音

西田ゆかり

胃瘻の身なれどわが身鼓舞しつつ穏やかな日々ゆるり老い生く

野間 和子

「象徴」の意義を求めて生まれし陛下の三〇年ゆるぎなく立つ

半田たつ子

美男よと晶子が賞でし大仏は百年経れど和顔変らず

日隈 京子

遠空を見上ぐる犬も生き旧ればもの思ふらしその横顔は

平井 堅治

健常の耳は聞きたい声を聞く欲張り補聴器それができない

北條 忠政

岩壁に打つハーケンの音ひびく小梨平の朝の静寂に

水澤 眞澄

つつましき現役のころの預貯金が引き算ぐらしの今を支える

武藤 昭彦

不覚にも予期せぬ君の訃の報に なるるごとく半生を悔ゆ

森 玲子

AIもスマホも知らず逝きし父母の残しし畑に春の土鋤く

門間 徹子

目覚めいるキリンやトラの眼の光る動物園の夜が明けるまで

山口美知子

耳の端に百足のようなピアス付け男の横顔いまだ幼なし

山室美代子

手作りの甘酒を飲み歩き出す煌煌と照る満月の下

渡辺 リツ

………題詠………

戦時に御山の駱駝喰はれけりあはれあはれや砂漠の舟が

秋廣 紀子

節約は吾にかかせぬひとつにて一山百円トマト購ふ

新井 忠彦

モスレムの面影残す山羊一頭動物園で今日も休日

榎戸 源茂

山を見て高きを知りて海を見て深きを知りて人を知るなり

小野 俊夫

愛宕山登ればビルに見下ろされ江戸湾見えた往時を偲ぶ

北川 孝規

木々芽吹き山の駅舎の丸ポスト分厚き封書コトリと落つる

北島 孝子

山門の傍へを今も師弟なり秀雄・方代の歌碑の寄り添ふ

小池 雪子

まだ逝くな青葉の候もあとわずか箱根の山の雪も消えたり

近藤 精一

情持たぬ重機にあれば容赦せず湯屋の富士山砕きゆきたり

篠崎ミドリ

命日の父の名呼べば命日の山彦となり父の名帰る

曾根新五郎

地方紙にくるまれ届くせんまいは阿蘇の山裾重そう添えて

中野 勝子

重力をふりきりて立つあの山は年速2ミリ天を刺す槍

中村 哲

病み飽きて一駅乗ればそこは春パンジー葦山盛りいちご

中村 良子

母の死に沢山泣いた妻愛し我の時には泪はいらぬ

新美喜代男

若草の山に昇りし朝日うけ鹿のいななく声響きたり

野田 保

山の向かうの光は花火か稲妻か東京方面大雨と言ふ

早川 笙子

西新宿に連なる峰々眺むれば東京にもありふるさとの山

林 博史

野球部の練習帰りに寄りし孫すきな山掛けつづけて四杯

林 義子

光明寺の枯山水に浮かぶ島苔のさみどり春を告げおり

北條 忠政

山盛りのドンブリご飯をかき込んでいざや出陣春の代掻き

松平 信久

ひと息に駆けおり来たる須走りに落石うけし山開きの日

水澤 眞澄

この国土寝返りうてば死に及ぶ人を呑む海人を噛む山

三井 透

山に沿い静かな裏道老ふたり慈悲なる露座の大仏目指す

宮島万津江

今晚を山と感じてか百歳の母は「アリガ・」とメモに書きたり 武藤 昭彦

石垣の崩れし跡に蛇の皮ありて静かな大山不動 山室美代子

亡き人の味噌漬けにした山椒の実これぞ限り粒つぶつまむ 吉川 尚子

千年前鎌倉山の松が枝に巣ごもりゐたる鶴を思ひぬ 和田 トメ

小粒だがトロリと甘い生き方の我山椒にはなれず吞まれる 渡辺 進

神奈川県

老母より「柩に入れて」と託さるる婚姻前の父母の手紙を 阿部 容子

亡き母の珊瑚のかんざし髪に挿し亡母と向かわん娘の婚礼に 有馬 榮

庭隅に朽ちたるあじさいの葉に見たり生きたる証の白き葉脈 有馬 榮

国師作と知らざる寺庭洞内に縁台小さく在りたる戦後 飯塚 千枝

朝の陽を背に受け長き私の影踏みて急ぎぬ勤めの人々 石川三枝子

由比ガ浜 砂塵にけむる実朝の舳先見る如杭のあはれを 伊勢田英雄

私には聞きたいことがありまして豆腐屋さんはどこにあります 壹谷 静恵

巨大なるコンテナ船の接岸を遂げタグボートは水脈を引き帰る 市原 昌子

油照りの浜に殯す鯨の子開く眼に映る母なく 井手 頓

早春の山門に立つ公孫樹朝日を浴びて力溜めおり 稲垣 勝美

ケシウ坂はどつちですかと問う人に夫笑みて指す化粧坂は、と 入江 曜子

火を出さぬ願いをこめて紫陽花の花殻飾る義母の厨は 内田しづ江

魚探覗み今だとばかり網落とす春まだ浅き初漁の朝 岡 彬

月に住む兎と遊んだハルちゃんは今英検にてこずりてをり 岡本 陽子

踏んばりてガラス越しに見るすさまじき地球の力や明石のうず潮 荻野 朝子

澄みわたる陸月の冷気海にみち猿島にみちわれも浸さる 奥 尚代

保育園に着いた途端に逃げる子は花壇で転んでママに捕まる 小野 均

日に三度「大好きだよ」と笑顔にて母に伝える介護も楽し 貝塚よしたか

これほどの多くの人を胎内で育てて産んだ母ありしこと

笠原 隆司

誹謗されしことば無視せよといふ声の消えがたきとき潮風匂ふ

片野 哲夫

火のやうに罵り合ひてやがて女は何か言ひつつ闇に立ち去る

片野 哲夫

春雨に稲村ヶ崎は色もなく波ひたひたと武士惚ぶ

加藤千穂子

46億年の地球に生きわれは惱めり足の魚の目

河北 笑子

「楽しむ」と鏡に向かつてつぶやけば心の固い結び目ゆるむ

川崎 由美

武士の声聞こえねど胸おどるいざ鎌倉へ馳せ参じよう

川崎 力也

いつからか紅を差すのも忘れたり母の肌着をたたみて思ふ

木俣 夏

雪が落ちるコーヒーの中に雪が落ちるこの土地へ来てやはり良かった

河野 真理

境内の空に広がる花のもと「きれい」と小さく病む夫の言う

小林 敬子

しんしんと降る雪見つつよるこびて積らずに止み又うれしかり

小林 富代

人々が中流意識を持つてみた青春時代の昭和なつかし

島 晃子

ああすれば否こうすればと繰り返かへし西日に丸き背を暖むる

杉田ゆり子

峰々が空を清めて紀の国の夕日は澄みて海に落ゆく

鈴木 幸一

スーパームーン夜勤へ向う背照らす靴音響き黒影が這う

高橋 敏弘

網小屋に集う漁師の日焼け顔大漁だった昔を語る

高橋 雪江

この眼鏡似合ふだらうかと近寄れる夫よ離れなければ分ならず

高島 憲子

人の世を何にたとへんときとの間に咲きて散りゆく桜花かな

高山 克子

終活と言うけれどまだ用がある夫を残し先に逝けない

武市 治子

大きじの砂糖を加えて肉じゃがの甘みも今日の我をしずめる

田中 幸子

落葉掃く、包丁を研ぐ、靴磨く、真昼間深き森の湖

外山 和美

元且の午後の空に舞う鳶のびいひよろろを補聴器で聞く

鳴瀬 弘美

介添えを頼まれ歩く道すがら媼のつなぐ手の指強し

根本 洋子

繋留の太きチェーンに雪積もり落ちては積もる波止場黙せり

原 和恵

電車内に漂う酔の香振り向けば恵方巻持てかぶりつく人

深申 方彦

層ですと賜びしみかんを無添加の一〇〇果汁にしたり

府川ハツエ

わが横につきてはなれぬ影の背の丸く見ゆれば姿勢をただす

川音 すす

雨の音止みてしんしん雪の夜に平成最後の睦月つごもり

牧野 艶子

「また来るネ」と言えば何時かと問う母の幼児のような瞳が継る

松原 佳江

ポケットの砂がさらさらこぼれて元気にすこしたいち日伝える

松村美知子

この宙に見えぬ電波の飛び交いて誰かをもとめ右往左往す

皆川 瑤子

もの言えぬ夫がおどけて指揮をせしノクターン聴く遺骨とともに

柳澤みゆき

焼き肉屋の排煙筒のむこう側平成終わりの初日の昇る

山口 敏男

カラマツの高き梢にカラス啼く平家の敗走見届けたりと

山田ゆたか

人がみな面取りをせる大根のごとくにあれと我は思はず

山本 澄子

弁財天の胎までとどけと春潮のたふたぶ寄する島のいくりに

由田 欣一

無機質な電光掲示の呼び出しに衆智衆似が「はい」と応へり

渡辺 昭宏

幼な日に「ぎゅっと抱いて」と甘えてた娘も今や二人の母に

渡辺 勲

……………題詠……………

大船の観音様は山に座し電車の乗り降り今日も見ている

麻生 初枝

わが裡の老いたる鷹を諒として青き山河に解き放ちたり

飯田 穰壹

背伸びして遠くの花火見つめてた山の向こうは鎌倉の海

石黒 雅子

山の辺の宮を下り来て池の端のかへでに瞑り鎌倉をさく

伊勢田英雄

山吹がこんもりと咲く角にすればもうすぐ我家散歩の終点

岩松 展子

山椒の葉を叩く手に残る香は祖父母の家の春の夕暮れ

白井 慶子

本尊を拝するうちに梢揺れ錦屏山の三・一一

宇田川榕一郎

山城の名残のしるき名胡桃の郭に見下ろす利根川光る

柏崎 忍

百三十段登れば見える鎌倉の山並に桜どっと咲き出づ

大石規余江

つかまりて歩む媼の百三歳齡の山をのほりつつ生く

唐突に「山 好きですか」問う君と戸惑う吾とはや四十五年

夏日なか霊場巡拝逝きし息子と鎌倉五山に御朱印を受く

桑の実に口を染めにし疎開さき校歌にみつつ山の名は三つ

枯葉踏み木の間に海を望みつつ花の寺へと続く山道

横浜に住みて十日の散歩道「あれは富士山？」と人に問ひたり

紅梅も咲き初天神は筆の山わが古筆が今焚き上がる

園児らの歓声あがる真昼時海より山に虹のかかれり

山井さん如何に在すや露味噌を分けくれし声耳奥にあり

小雨降る山寺の扉は閉ぢられき節穴覗けば御仏の笑み

今頃はみやまきりしま咲きていんわれに近づくふる里の山

夕暮れのせまる山みちくだりきて河鹿のこゑは麓に響もす

三箇日プラゴミの山高くして娘等は職場に戻りてゆかん

海も無し山も無けれど平垣なわが町誇るあぢさゐの郷

聞きたいことは山ほどあるが帰省せし息子は多くを語らず帰りぬ

救急車夫を運びてひた走る鎌倉山のしじまかき消し

踏みゆく靴にかさかさ従きてくるこの山音から抜け出せずる

閉じ込めた時を抱えた山里の母の暮らした家に春来る

ばらの咲くアメリカ山に縄文の貝塚ありきと碑を読みて知る

源氏山へ続く落ち葉の尾根道に埋もれてあらむ父の昭和は

山笑いケヤクヌギの芽の動き祭の太鼓に田の土起こす

足るを知る老いそれぞれの新茶かな背中合はせに海と山見る

槍の秀に一条の光射しければ山莊前を老若の発つ

月山の子食めば思い出づ訛りの強き友の面影

荻野 朝子

川崎 力也

神崎八重子

栗野 東代

小林 敬子

杉田ゆり子

十河 牧子

高橋 雪江

竹中 亮子

田保美代子

塚田キヌエ

仁藤 和子

長谷田光代

府川ハツエ

藤澤美智子

藤本 令子

牧田 明子

松村美知子

水谷真知子

八城スナホ

山口 敏男

山田ゆたか

大和 嘉章

渡辺 勲

雑木山の天辺に雲集まりてみるみる里に降る春時雨

新潟県

きみの居ぬ人生の可否味はひぬ三十年ぶりの茶房にひとり

鬱を病む娘に文を記したり雪割草は花芽見せしと

引出しに今日の哀しみ閉じ込めん最終電車の軋む音聞き

目をつむり耳を枕につけて聴く八十年の絶えざりし音

極楽寺駅降り右へ友の家ここがふるさと湿度の話

埋立ての辺野古の海は濁り増し天の悲しみ見ゆるが如し

寒に入り甘みきはだつわが郷の冬菜をゆがき大皿に盛る

二千キロを五体投地の行をしてポタラ宮詣の若き人々

.....題詠.....

中国の戦線に立ちし父あれば裏山菜莢庭に繁れる

富山県

抗わず物忘れゆくわが脳よ故に学ばん故に知りたき

冬の陽に見得切るように枝広げ桜大樹は春を待ちおり

庄川に鮭の溯上の噂聞き自転車に乗り川に沿いゆく

介護する夫を寝かせてから来たと同級会の宴終るころ

はやぶさ2の偉業を思ひ宙仰ぐ紅梅もまた紅を香らす

.....題詠.....

修行せんと本山祖院の門の前修行の許しをひたすらに待つ

しんしんと底冷えの夕夫と食む山芋とろり熱き御飯に

山もなく谷もなければ平らなる道をゆつくり歩いて居ます

石川県

大陸の吹き出す寒波に撓るごと腰曲げて立つ日本列島

渡辺 ゆみ

荒井由紀子

折居 伸

金子 和子

菊池多恵子

七里 松枝

関 泰邦

花岡 修一

坂西 直弘

酒巻 幸子

石浦 好代

浦上 紀子

刑部 宏一

中沖 正之

森松さち子

在田 智玉

石浦 好代

岡田 澄江

谷中 正秋

午前四時「すぐ来て」の電話 病院へ急ぐ車内に深まる沈黙

巻かざりし白菜に立つ花芽ありそを摘みきたり春を食みたり

逆らわぬも一つ生き方如月の流れのままにカルガモ下る

石花とふ名を知りてより牡蠣食めば海中ひそむ花園を恋ふ

息の根の止まつたはずの原発が息吹き返す波の退く間に

みどり兎にマイナンバーの登録の用紙届きぬ写真添へよと

..... 題詠

ほうほうと草燃え白煙空を突く大室山焼き春を告げおり

里山にひっそりとある一軒家「英霊の家」の札今も掛け

水色に春めいてきし白山に百三歳は心を修む

ひとり棲む山家の婆の日なたほこ寝そべる猪と天を恐れず

われを見て強張るをさな 鏡面は髪ふり乱す山姥映す

山茶花は冬の寒さに耐えながら狭庭をあか紅く染め咲きにけり

山や海望むホームに山や海なき元号を母諳んずる

福井県

あのころは楽しかったと呟いて父の写真に手を添える母

..... 題詠

わが山の境を知らぬ若者の増えゆく先に道も消えゆく

浦里に春はそこにとにほい来る枯山に咲くもくれんの花

山梨県

三合の米をさくさく研ぐ儀式しかと生きむと三日に一度

寄り添へど同じ命を生きられぬ幸せでしたか四十六年

さみしいよこんなに生花もらってもうれしくないよ友は旅立ち

橋本美津子

前川 久宜

松本いつ子

室木 正武

室木 正武

山上 節子

飯田 世三

陶山 弘一

近吉 三男

堂前 弘子

橋本美津子

堀 二郎

室木 正武

八杉 典子

大江 青流

田邊 益造

加賀美 公

後藤 榮子

渡辺さちえ

..... 題詠

山頂をはなれる雪は西方の風に渦巻き昇りゆく竜

長野県

雪降る日青い絵葉書届きたり「Tシャツ一枚、大東島にて」

軒先のつばくろの巣に五羽生れ改築工事の甚く遅れぬ

フロントのA I ロボット応対す架空にあらぬ現の怖し

薪を割るわれの姿を妻は見て男だったと今更に言う

足痛の我に肩貸す妻の背は七十年の刻を語りぬ

ひんやりと舌に熟柿甘き夜友のやさしさ我が身明るむ

つづれ錦のやうなる空にエンジンの音響かせて漁船出でゆく

..... 題詠

セピア色の歌集「立山」そつと開く柳瀬留治著三圓とあり

山頂の手前の無念の決断の石鎚山いしづゑさんに雪の壁あり

軽トラがやつと入れる山の畑仙丈ヶ岳を眺め種蒔く

山姥の棲むとふ山に入りたり信濃の山はわれと遊びぬ

鈍行に老若男女の登山靴どつと乗り込み挟まれており

岐阜県

レシートに残る師走の金曜の仕事帰りの君の夕食

トンボがようちゆうをとぶトンボがようちゆうをとぶようちゆうをとぶ

あぜ道のお地藏さまに野の花の供えられあり限界村落

告知受け二度目の餅を搗く夫は孫の十八番を可愛く真似て

山畑の柿の木低くそろいいて若葉が淡く光をかえす

田植する母の小声は風にのり泥の匂ひを交へ聞こえ来

豆まきも一合升でパラパラと気休めのごと厄をはらいぬ

中村 今代

磯谷留美子

乾 百樹

後沢 恒子

藤原 寛

藤森 弘國

山岸千世子

吉川 久恵

荒井 清子

磯谷留美子

市川 光男

乾 百樹

宮坂美恵子

上村 篤彦

栗田 史朗

小林 伸江

駒淵とも江

子安 浪子

櫻井 正文

樋口 貴恵

遂にお前も小函に嵌まり指繰るかわれは指折り三十一詠むに
カンダタはわが心にも棲みてゐん春風に光る蜘蛛の色見つ

……………題詠……………

富士山をはっきり見たら大吉だ病院へ行く新幹線で

木の椀に息をふきかけ一合を湯気もろともに飲みし山羊の乳

砂山を無心に作る幼の目突き崩す手となるのはいつぞ

指差してお山お山と呼ぶ孫はどんぐりころころ二番を歌う

伊吹山頂大の字に寝て我知らず吸い込まれいる空の青さや

銀嶺に神業の如手繰操る山男目玉輝く

池田山三度雪降りや里積る二度目の雪見て年賀状書く

碧い空青い山並青い風蒼き琵琶湖よ白き蹊

雑草に獣の住処抜がるを仁王立ちする案山子頼もし

日溜りに食べちゃいけない茸あり授業を抜けて冬の里山

静岡県

江の電に揺られゆらゆら紫陽花の影の向かふに托鉢の僧

丘の上の高層マンションの窓ひとつ我が家なるぞ新幹線より見ゆ

雲低くこもり居る日の昼さがり風花のごと梅の散りばふ

唇に触れては消ゆる風花にかすかに匂ふ春の訪れ

漆黒の宇宙に浮かぶ星中に戦ひ止まぬ我が地球あり

……………題詠……………

山動くとうたいたくなる世の中の動きを求めて署名している

幾筋の山襷流るる雪模様片照る富士をただ眺めろつ

草焼きの黒き山肌に一筋の残雪抱く九重連峰

一夜にて真つ白になりし富士の山干し大根のじりじり乾く

松尾 東一
森 圭子

江尻 恵子

上村 篤彦

川出香世子

駒淵とも江

澤田美智子

田中 光夫

樋口 貴恵

松尾 東一

松尾 東一

三田村広隆

渥美 昭

坂口 ちせ

柴 親子

竹村三千代

肥田 洋子

木俣志津子

近藤 房枝

肥田 洋子

宮城 礼子

海山と書きわだやまと読む姓わだつみと呼ぶ人も減りたり
愛知県
また一つ古書店閉じて我が町に『旅愁』求めし思い出消える
あふれ出た郵便受の新聞紙十六階のナベさんの死は
天井にハクビシン棲みしとふ話題から首都圏同期会始まる
寝そべりし子のふいに「よし！」と立ち上がる涙二粒床に残して
大仏は何を言っても微笑みて背にあかあかと寒の夕焼け
「所持たよ」と言いつて出掛けし三分後ぬれ縁に鳴る夫のケータイ
退院後八日目の夫まっすぐにランドゴルフへ出掛けてゆきぬ
Yシャツは次々野良着となりにけり退職十年野良着なくなる
戦争はしてないけれどこの国が平和であるとは信じられない
戦にて右眼の光失いし方代思う海のテラスで
わたしには優しかったとお決まりの台詞で終わる2時間ドラマ
インスターを下りれば富士は目いっぱいキントン雲を友として佇つ
今日あすのこととでなければ五輪より近づきてあむ父との訣れ
はつなつの北鎌倉の駅を出であぢさゝあまでの列に加はる
他人の恋ならよく見える追いかけてゆくほど彼は逃げたくなると
茶花咲き沢のほとりに路のとう過疎の山里春陽まぶしき
「おうまい」君の一言きゅんとしてなすのみそ汁出し取り始む
泣きながらレッスンに来た心くんの今日のメニューを急ぎ巡らす
洗顔中浮かびし短歌のあの言葉思い出せない 海馬がんばれ
農道のエノコ草に囲まれて佇むわれは風のはらから
月を詠み桜をよみし西行の命を惜しむ歌もありけり
もらい風呂お米を貸してつけにして言葉が私の過去を知ってる

今泉 一夫

植田 和子

上田紀美江

小川 清紅

笠井 忠政

梶村 京子

河合 佳代

久野てる子

久野 利典

澤村 陽子

清水 将一

鈴木 保江

高橋みどり

高橋みどり

筒井 英雄

戸澤三三子

豊田 昌子

中根美紀子

中村佐世子

羽生由紀子

林 建生

綿入れに手拭いかむり夜遅く母は吾を待つ田舎の駅で

「印刷」の書体うつくし看板がさびしく見へる廃業を聞く

……………題詠……………

親兄弟猫山羊鶏とほき日の童のわれが夢に連れ来る

あらそいの果てのむなしさ襲いきて山にさびしく雪を見ている

ふるさとの高尾山すそ丁字路に父はは音盤を商いたたりし

立ち待ちの月は昇りぬ源氏山公園 君はもう来ないのに

恐山のかざぐるまは亡き幼の吾を呼ぶ声かとふりむきて見る

山と谷折り目正しき千代紙の母の折る鶴飛ぶ日を待てり

山が見えその向こうにも山がある海なき街の丘に登りて

三重県

地を這はば猛き風をも友としてしろつめ草の花はけふ咲く

空よりも夕日に映えし由比ヶ浜天空の月波に崩れる

芒の穂空地に繁り幾体もみみずく細工作れそうなり

青深き葉間に光る万年青の実誰に告げやうか心地好い朝

幸不幸いづれに傾く天秤のいづれともよし春の陽きらら

君癒ゆる日を願ひつつすこし来ぬいぬのふぐりの畑に咲き初む

……………題詠……………

雪晴れて鶏足山にくつきりと名前の由来示す足跡

山の雲植田の水に下りてくる日暮れて月の下りてくるなり

山裾の人影のないひつじ田に鷺が時おり何かつひばむ

滋賀県

傘の下これも初めて二人にはビルの谷間に温もり灯る

真野 勝子

丸山 勝也

大下カヅヨ

笠井 忠政

加藤美智子

高橋みどり

中根美紀子

中村佐世子

湯朝 俊道

岡 公一

奥山 功

加藤 正子

高田 元子

長谷川艶子

椋本 明美

森田 晴子

内田 雄亮

奥山 功

高田 元子

田中 新一

田中 新一

お楽にと歯科医やさしく微笑みぬ近づくアームにぶく光れる

京都府

いのちさえあればと三朝の岩風呂に乳房なき胸しのびて入りぬ

解くことのできぬ課題があるととして風の便りも届かずに、春

間伐もせぬまま育つ杉山に父母思ふ吾れも老いたり

……………題詠……………

向う山の影を写してしずもれる朝の代田にさざ波走る

鴨川の亀石渡る少女等の踏み外せし声山笑ふなり

山奥のあばら家なれど国旗出し遠住む孫の成人思ふ

大阪府

まだ起きてもう起きている母なれど明昭平は東の間といふ

若き母の足もとに見るうつしえの今も変らぬクローバーの花

いつもなら空缶つぶす槌の音今日は休みか 冬の雨降る

今日もまた人工知能のパソコンに多くを尋ね一日を終える

大勢の人の気配の樹氷居てじつと黙って太りゆくらし

槌音に混じりてベトナム語聞こえぬし新しき家に子らの声する

顔知らぬ父が浴衣にななめむく戦時中撮りし写真のなかに

吉里吉里のかさ上げの道今もなほシクシクシクと霜柱泣く

延命の措置をしないと決めたことよかったか母よまだ解はなし

さがらずに前を歩いて影踏まず時代も変わる私も変わる

山峡に甘茶香りし灌仏会子らを見ぬ里いかにあらむ

争ひてのちの化粧のととのはず墨ひく筆は眉尻上る

……………題詠……………

山の宿朝の冷気に目ざむれば雪の結晶びたりと窓に

樋口満智子

近江 瑞子

田中 典子

松下二三夫

近江 瑞子

近藤 好廣

松下二三夫

赤澤 皆春

奥野 玲子

金子 公宥

金子 公宥

久保さくら

熊ノ郷紀子

熊ノ郷紀子

倉田 淨賢

長井 洋子

早川 成美

船越 一英

山下 道子

赤澤 皆春

赤澤 皆春

赤澤 皆春

赤澤 皆春

ふる里の天城の山の名物はワサビの香りと浄蓮の滝

百名山登りし友が階段に寄り添ひくる手のふんはりとする

砂山を造ったおもいで海とつながっていた湘南の海

鹿背山に裂けたあけびをかじりたれば物足りぬ味初恋に似る

兵庫県

追い継る母の目線を断ち切って向けた背中に鬼面を見しや

ペランダで冬陽を浴びしサボテンを三時に部屋へ戻しぬ今日も

『百代の過客』に日本人吾が知らぬ日本のこころ教えまししか

「ハンカチが落ちたよ」的な雰囲気で「一緒に暮らそう」なんて言う君

福耳を持って生まれし孫二人我に似ずとも良しと思ひぬ

引き伸ばせば少しほやけて「笑う父」ホームの母の筆筒の上に

駅ホームスマホに夢中の小女避け盲導犬はゆるり歩めり

電話する「母さんだけど」……何事と思う気配の間あり

電線を埋めつくしたる椋鳥の一羽一羽に冬のあけほの

美しき大和言葉にふれし日は老いたるわれの胸のふくらむ

わたぼうし集めて作った雪うさぎ添えた山茶花残して消えた

帰るさの海にかかれる虹を見て兆し明るき明日と思へり

山あいの里にひそつと咲きはじむ節分草に冬の木もれ陽

クラスでは小声の田中は登山部で誰より大きく叫ぶ「ヤッホー」

柔らかに銀のねこ毛につつまれて一途に芽吹く山毛櫨の一本

けもの道のごとき山道どんづまり山葵田の見ゆ白き花咲く

ゆるやかに菜の花畑に風わたり三輪山遠く春ふかみつつ

山の字の第一画とならんかな或る日思えり思いたるのみ

金子 公有

熊ノ郷紀子

黒木 淳子

長井 洋子

足立寿美夫

伊藤 弘子

小野寺徳子

木内美由紀

木村 仁美

左藤 俊弘

白数シゲ子

田添 安代

春名 直美

藤井美佐枝

堀内加寿子

安田多加子

秋田由貴子

米谷 茂

間端 達也

間端 達也

富田 昌代

春名 直美

灰色がうす紫に変わりゆき遠くの山に春近づきぬ

奈良県

はうじ茶の香広がる昼下り友への便りペン走る音

ひとり居の話の相手はロボットくん朝な夕なの声の愛しさ

戦時には人の身を柱と数ふ言葉知る人少なくなりぬ

あんこと苺好物二つ丸められ何故だか好きになれぬこの味

……………題詠……………

古里の山は静かに息を吐き運び出されし木の匂い立つ

和歌山県

秋日和小山の向うは祭らしみこし練る声風に乗りくる

ピーマンの枯枝バリバリ片付けるカルメン序曲の鼻歌にのせ

ぬぐき目を背に村人ら声上ぐる餅投げの庭初午の昼

……………題詠……………

夜明け待ち拓きて植えし蜜柑山明けの明星をこより昇る

両の手の窪に受け取る円なる山かもしれぬ寒卵二個

山峡に法螺貝の音のこだまして女人結界奈良の奥山

産士の雪解も告げて薬屋の富山なまりに生きの温とさ

正座して見る大相撲いつしかに減りゆく四股名の山や川さびし

木ぎ萌えてみどりふくらみ山腹のお社今日は小さく見ゆる

鳥取県

伐採にかかる費用のままならず枯れ山のまま二十年経つ

喜怒哀楽顔には出さず礼をして土俵の力士分かれて去りぬ

ときめかぬ約束ばかり増えてゆく歯科医と決める「花の咲く頃」
はじめての沐浴終えし子は眠るちいさな光をぎゅつとにぎりて

松浦知恵子

加藤 道子

内藤 晴子

堀内 房子

宮本 郁江

三木 武美

木地智恵子

龍田 早苗

中村 照美

尾曾佐千子

北村 薫

木地智恵子

田尻 静子

中嶋 陽美

中村 照美

荒井 玲子

黒見 明子

佐々木千代子

中本久美子

..... 題詠

「山門に入るを許さず」の碑を越えて暈酒はすでに宿坊の中
艶やかな山繭の持つやはらかき櫛のみどり 皇后の繭

島根県

白く浮く半月かすめて西へ飛ぶ一機のありて日の暮れてゆく

風の中いちょう大樹の黄吹雪が突如はじまる家職捨てたし

朝食に4色パンを食べてみる子どもにもどる古希の目と頬

自転車白雪姫がこぐごとしこの冬最初の雪の降りよう

諦めが怒りに変わるチンピラのような雪に顔打たれつつ

下を向き松の上枝に動かざり青地の洋風カイトの真赤な目玉

安倍首相なりの正義にずるずると付き合わされて平成終わる

..... 題詠

粉砂糖ふりかけたような山並を縫ってがたごと伯備線がゆく

岡山県

遡上する鮭のごとくに帰省して人々こそぞりて初詣する

家持の歌にこんなのあつたよね東の空に冴ゆる三日月

片隅に玉葱のこし一面のなすなの花は耕やされゆく

納戸には祖母の簪つげの櫛皆勤賞の文箱もありき

..... 題詠

雲の湧く山ふところの父の墓七年を経て遠景となる

霜がとけ落葉の湿りし操山きようは大師堂をめざして登る

給食が余らぬように君たちがいるんだ今日も五人山盛り

春山の匂ひを越えて浜へ出る雛へ供する浅利を掘りに

エル・グレコの受胎告知のある街は鶴の姿の山に守られて

荒井 玲子

石湯 和子

青木とら子

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

中村ゆりか

一柳いくみ

高原 晴子

森 富美子

山口 洋子

赤田 文女

一柳いくみ

小橋 辰矢

高原 晴子

宮本加代子

広島県

光りつつ糶摺機より流るるを手に救いみる今年の米を

子を育て夫を送りて今ひとり悔いと達成行ったり来たり

豆に代へ投げるボールに逃げまどう鬼装束の若き介護士

..... 題詠

紫の木の芽を抱き山霞む落葉すれど生きて春待つ

ふるさと宅地が殖えて変わりゆく母と眺めた山は残れり

新しき線路ゆつくり進み行き山間の町に兄の家訪ぬ

山口県

「ご先祖とあそぼ」と孫を誘い出し墓前にはこほこ鯛やき食べる

本棚から本取るように背表紙の赤きレトルトカレーを選ぶ

水たまりの中に濡れてるわたくしが時折ゆがむ吹きくる風に

子の顔を東京駅に見ついたり闇夜にポツと明かりが見えた

貫、垂木、トタンの数を称呼して匠は弟子に記録うながす

うらうらと耀う春の川面には去年の子鴨がつがい泳ぐ

..... 題詠

夕焼けをおいでおいでと山が呼ぶそうして後に隠してしまつた

間引き伐る檜一樹の空間を圧しつつ降る山の天気は

来し友に河津桜をめめて指すわが山畑のごとく見上げて

あなうれし「山トロごはんを食べるぞ」と子らの手拍子パチボンびびく

徳島県

冬ざれの江の島遠く眺めをりかつて好意を抱きし人と

僕に合はせなくていいよと子はいひぬ単身赴任の朝の出かけに

岡崎 明治

栗田 孝子

平越 義昭

石口 史子

栗田 孝子

平越 玄頌

井川 栄子

倉谷 節子

瀬戸内 光

田中千佳子

弘兼 安雄

山本須美子

田中千佳子

藤井 重行

藤田 幸子

松沢 公代

喜島 成幸

下町 昭

.....題詠.....

杖ついで遠出かなわず机の上に山積の本読掛けの本

松浦 哲子

香川県

だれもかも優しい心になるだろう讃岐平野に雪降り積もる
生きたくも死にたくもなき思いする八十四年生きて老いれば

赤松美和子
庄司ハナ子

愛媛県

「お母さん、強烈な人」と言われ恐る。母は母しか知らぬゆえ
在りし日の夫の遺せる柱釘やっぱり曲つて「わたし」を見ている

大西 伸子
岡田千代子

神様が吹く笛を待つアレイショナルタイムの如き老後を生きる
吾一人の家族調査を書き終えて夕餉の鯖缶パカッと開ける

園部 淳
高橋 征子

スマートフォンが私の居場所ばらすから日本脱出ゆめ思わざり
自販機のコーヒー試歩の途に飲みて癒えゆく父に饒舌戻る

眞部 孝司
三島誠以知

.....題詠.....

ガイド指す廃鉱山の社宅跡灯ともすごとく茗荷の自生す
雨風は石鎚山から降りてくる鞆轡ゆらす人いなくなる

高橋 征子
眞部 孝司

高知県

自治会の役を解かれて気付くのは空き家が並ぶ夕ぐれの道
村の端に六〇〇年生く椋の木に飯など供える佳人の居ませる

石元あけみ
大寺 和美

.....題詠.....

里山を回るドラゴンバス今日は遍路数人我が町に生む
足利の時代より生きし椋の木にモモンガミミズク山の衆が寄る

石元あけみ
大寺 和美

福岡県

救急車きのうもきょうも乗り入れる昭和ひと桁多く住む村
小康をえている友がもぎ呉れし笹に十余のレモンが匂う

青沼 君子
飯田 俣子

酒飲まぬわれは羊羹食みながら酒好きの詠む酒の歌詠む

市川登美榮

笹やぶの葉ずれの音の忙しくて小犬出て来ぬ草の実つけて

加地タマリ

足指に障るものありむむむむむ 靴の中にも節分の豆

樺島 策子

嫁ぐ娘のべールをおろす秋の日を雲がさえぎるひとときがあり

川畑万寿代

けやけ路の椅子に腰掛け古い師幸薄き顔で客を待ちをり

岸原 修

寂しさの寄せくる日にはひた歩く冬ざれの空ゆく雲のごと

白谷 明美

夕映えの光織りなす風景は夜の闇よりひどく切ない

恒松美千代

阿弥陀仏を釈迦牟尼仏と誤認せし晶子を思ふ青葉耀る頃

中村 重義

われにまだ少女のごとき声の出づ雨戸を練れば守宮とびだし

荷福 節子

祖母が植ゑ亡母の育てし白椿一輪手折りてわが妻の手へ

藤村 義治

.....題詠.....

二年も仮設で暮らす被災者の山家の畑に梨の花咲く
歪なる山芋やさしくすり下ろし独り夕餉の麦飯にのす

井上 義昭
大橋 拾子

掃き寄せる落葉の山を乱す風避けられぬものあるということ

塩田 直子

働けど働けどなお仕事の山じつと手を見る間もなき現場

白谷 明美

柿すだれ大根すだれそれぞれ軒に干さるる肥後の山里

高橋 将代

山崩えに近寄せざりし山笠の滝の干涸れを怖れ悲しむ

光増 光子

山盛りの白い御飯があれば良し昭和九年生まれの亡夫は

若林 幸子

佐賀県

親亀が子亀を乗せて日向ほこ眠くなりさうな春の午後です
三年前、ねこと短歌がやってきてふみふみされつつふむふむつくる

野中美佐子
古里 福子

朝冷えに印半纏羽織りたる茶髪若もの神事に対ふ

山口 須美

.....題詠.....

丹念に山折り谷折り繰り返しわが折鶴のいま立ち上がる

野中美佐子

長崎県

.....題詠.....

此処に生きここに咲くよと遠山にさくら一樹の白き花照る
緞帳のごとく山肌のほりゆく春立つ朝の霧を見てをり

熊本県

子どもらの社会科見学の列が行く商店街の店先覗きて
霜白らみ朝の便りの新聞もいてつく草を踏みつけて受く
大銀杏映ゆる黄葉が大阿蘇の王者のごとく朝の光に照る
もう二度と夫の葬儀を出さずとも良きとう思い七七忌忌

.....題詠.....

葉擦れ聴く鎮守の杜のうらの山狸いそいそ供物曳き行く
雪降れど根雪とならぬ阿蘇の山瘦せたる髪が目にと迫りくる
骨壺は富士の絵柄に決めました弾丸登山した君だから
上宮を背に山並を見て育ちたる父母氏子なべて素直なりけり
声あげて駈けのぼりたり赤樫の嫩芽萌えたつ里の裏山

大分県

「ここだけの話」と聞けり こだけと言ひつつコタツの夫に洩しぬ
壊れゆく母の小言を聞き流し浮腫し足の爪を切りやる
ゆたんぼのようなほのほのほんのぬくもりあいし昭和さめゆく
苦しみて生きつつをれば鳥が来て野良猫が来て何か言ふなり
百歳の母を祝ふと来し市長床に膝つき祝辞を述べたり
手に笏を持ちて足踏む白足袋の樂士の幣のくるくる廻る
吾村の若衆は四十、五十代六十代もまだまだ若い
今年こそ連れて行ってとせがんでみよう湖のほとりの桜のころに

守田 里実
山下久美子

木下芳根心
齊藤十三男
田中 満之
益田 節子

沖田須磨子
田中 満之
益田 節子
宮崎 忠允
吉川 歌世

大渡キミコ
原 ひろし
久保田嘉博
後藤 史子
後藤 史子
佐世 弘重
重光 寛子
高倉 政子

終わりゆく準備するののか食餌せず瘦せ細りゆく愛猫を抱く
農に生きし祖父勘太郎を偲ぶとき「勘おつさん」といまもなほ呼ぶ
おそいくるこの寂寥を越えゆかん暮るる窓辺に祈りささげて

.....題詠.....

鮎光る流れ清かな久留須川信者伝説の山々霞む
演習のたびに実弾はかばかと撃ちこまるれば山とて怒る
愛していると云えないほくが好きなのはいわぬいろなり 山吹の花
宮崎県

本当はあつたと思うあんなこと気色ばみ言うなかつたといううそ
疏水より引きし流れに影うつし紅葉織りなすこの無鄰菴
病みしこと傷つけられしことなべて跡形もなし朱の冬薔薇
鎌倉のレンタル和服身につけた台湾乙女を撮るフランス人
.....題詠.....

草を刈り肥やし二度やり実りたるミカンの山は鳥と共生
鹿兒島県

きさらぎの海鳴とどく夜すがらに虎落笛きく朝焼の空
夕闇に帰宅を急ぐバスの中窓越しに見入るだんらんの明かり
夕暮の暮れ増す程に薫りたつ金木犀の主張なるかな
沖縄県

木洩れ日をうけて揺れぬし煙草の花今年も咲けるや化粧坂の辺
まな板の際よりなだる長芋のばたあの満ちてふらいばんの中
台風のかすめゆくくらし次々としぐれの過ぎて梢のさわぐ

田中由岐子
羽田野とみ
松本トシ子
久保田嘉博
中島 紘子
檜垣 実生
上野 直
徳永さち子
福留佐久子
松浦 淳
熱田 民恵
笹川 満子
田中 司郎
西園 屋恵

照屋 敏子
山城 孝子
与儀 典子

NHK学園生涯学習フェスティバル
鎌倉市短歌大会
入選作品集

令和元年五月十六日発行

編集発行
NHK学園

〒一八六―八〇〇―一

東京都国立市富士見台二丁目三六―二

電話 〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

NHK学園 鎌倉市短歌大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「鎌倉市短歌大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500円

- * A4判 (297×80 ミリ) でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

▼入選証

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け(青)

★作品は2行になります。ご指定のない場合は自動的に18字で折り返しますので、ご了承ください。

《専用額》

- ①短冊掛け(青)
 - 材質は和紙、壁掛け用です。
 - 1枚 1,500円 (税・送料込)
- ②額(クラシックゴールド)
 - 上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
 - 1枚 2,500円 (税・送料込)



《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
- 1つ 13,000円 (税・送料込)
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 鎌倉市短歌大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 _____

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品 (全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要な事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
鎌倉市短歌大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号													
0	0	1	9	0	7			5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園教材サービス											

※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。

※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。

※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。

※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

令和元年度

NHK学園鎌倉市短歌大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号											
住所	〒												
電話番号	-	-											

○入選証

掲載誌 ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金額
				1,500円		
				1,500円		
				1,500円		

◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。

◆同じ歌を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。

○専用額

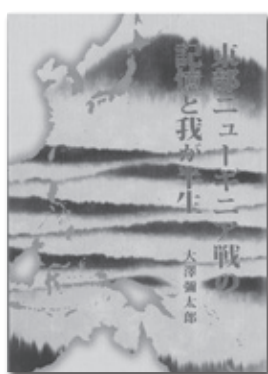
※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,500円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,500円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



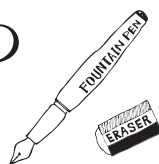
日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK 学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK 学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャッスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お問い合わせ。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃ってなくても大丈夫! まずはご相談ください。出版アドバイザーがていねいにご説明します。

お問合せ NHK 学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

2019年度 生涯学習フェスティバル 短歌大会

下記のように開催を予定しております。みなさまのご参加をお待ちしています。

大会名称(案)	開催(発表)予定日	投稿締切	題	会場
伊香保短歌大会	6月25日(火)	締め切りました	*温	伊香保温泉 ホテル天坊
武蔵野市短歌大会	8月2日(金)	5月31日(金)	*野	武蔵野市民文化会館
誌上短歌大会	令和2年3月3日	12月22日(日)	*道	—————

*題詠は題からイメージされる作品募集となりますので、作品に題にある漢字が入らなくても結構です。

生涯学習フェスティバル短歌大会のご案内

全国各地や誌上での短歌大会を開催しています。どなたにもご参加いただけます。規定の投稿用紙(コピー可)をお使い下さい。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。(自由題一首または自由題一首+題詠一首)

◆**題詠** ※題からイメージされる作品募集となります。

※題詠のみの応募はできません。

◆**未発表の自作に限りません。**

◆**二重投稿は固くお断りいたします。**

◆**投稿後の作品訂正、さしかえはできません。**

◆**同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。**

投稿料

①自由題一首の場合 二、〇〇〇円

②自由題一首と題詠一首の場合 二、八〇〇円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

◆**送金方法**

郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください。(切手の代用は不可)

郵便払込をご利用の場合

郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投稿料をご記入の上、払込みください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号…00180-2-357944

加入者名…NHK学園短歌大会事務局

賞・発表

◆大会大賞(文部科学大臣賞の候補作品となります)、市長賞、選者特選・秀作・佳作・入選など。

◆特選・秀作内定者には事前に文書でお知らせします。

投稿された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。(誌上大会を除く)

会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆入選・入賞作品は、NHKとNHK学園で使用させていただきます。

NHK学園生涯学習フェスティバル

武蔵野市短歌大会

（東京都武蔵野市）

豊かな自然と文化施設も充実した武蔵野市にて行われる大会です。この短歌のつどいにぜひご参加ください。

投稿募集

自由題のほか、

題詠は「野」（テーマ詠）

題詠は「野」の漢字が入らなくても結構です。

投稿締切

二〇一九年五月三十一日（金）消印有効

日時

二〇一九年八月二日（金）午後一時～四時

会場

武蔵野市民文化会館

鼎談

「わたしと短歌」

小島ゆかり・花山多佳子・穂村弘

選者

岡井隆・小島ゆかり・花山多佳子
藤島秀憲・穂村弘（五十音順 敬称略）

当日詠募集

（無料）

題「武蔵野の夏を詠む」

当日、会場で自作一首をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。



中央通り

武蔵野市 短歌大会への

ご参加をお待ちしております。



武蔵野プレイス



ゾウのはな子の銅像



ハモニカ横丁



岡井 隆
(未来)



栗木 京子
(塔)



篠 弘
(まひる野)



花山 多佳子
(塔)



古谷 智子
(中部短歌)



短歌友の会 ご入会のお誘い

どなたでもいつからでもご入会いただけます



伊藤 一彦
(心の花)



小池 光
(短歌人)



黒木 三千代
(未来)



坂井 修一
(かりん)

選歌と
発表を楽しむ
コース

選者直筆の
ワンポイントアドバイス
が入った投稿レポートが
お手元に戻ります。

年間4回、1回に5首、合計20首を投稿！
歌壇で活躍する9人の選者から、希望の選者の”選”が受けられます！

(上記は、2019年度 短歌友の会の選者のみなさまです。)

選歌結果は作品集『彩歌』(5月・8月・11月・2月発行)で発表！

投稿者全員の作品が掲載されます。

会員相互の作品鑑賞の場もあります。結社や地域を越えてのびのびと歌づくりの輪が広がります。

年に1回、年間選者賞を発表。賞状を送ります。

受講料

23,000円

受講期間

1年(自動継続)

お送りする教材

投稿用レポートセット(4回分)、
作品集「彩歌」期間中4冊(別送)
機関誌「短歌春秋」期間中4冊(別送)



作品集「彩歌」
に掲載

1年に4回投稿リ
ポートを提出して
いただき、作品集
『彩歌』に掲載。
皆様のお手元
お届けします。



機関誌「短歌春秋」

友の会の副教材として年に
4回、お送りします。毎号、
歌づくりに役立つ特集や短
歌入門や実作コースを学
んでいる受講者作品の「誌
上添削」「秀歌鑑賞」など実
作に欠かせない内容です。

鎌倉市

ふるさとと寄附金

未来へ

かたちを

残したい

選べる使い道

歴史的遺産や文化財の保全のために
文化を創造発信するために

びどろ等自然景観保全のために

観光の充実のために

など全20項目

鎌倉の美しい自然や景観、貴重な文化財を大切にし、次世代に引き継いでいく。鎌倉の魅力と価値を守り、さらなる高みへ。鎌倉を愛する皆さま、「鎌倉市ふるさと寄附金」へのご協力を、お願いいたします。

鎌倉を彩る

こだわりの返礼品(一例)

ローストビーフの店

鎌倉山 本店

旧家の別荘の面影をそのままに、鎌倉山の豊かな自然の中に佇むローストビーフの店「鎌倉山 本店」。塩と胡椒だけを使い、丁寧に焼き上げたローストビーフは別業以来、情熱を傾け続けた自慢の一品です。

鎌倉パークホテル

日常から鎌倉へ、鎌倉の文化と歴史、そして、おいしい料理。心ゆくまで鎌倉時間を堪能できるホテル・イタリアの家具と調度品、天然石を贅沢に使ったバスルーム。居心地のよさを演出するのは上質なゆとりです。



メーカーズシャツ鎌倉

鎌倉で創業して25年、高品質なシャツを低価格で提供するという理念のもと、生地・縫製パターンにこだわりの抜いたシャツを作り続けています。メンズ・レディースシャツの他にも幅広いアイテムを揃え、厳選した上質なものをお届けしています。



申込方法

1. ふるさと納税ポータルサイト「ふるさとチョイス」から申込み
2. 市ホームページより申請書をダウンロードし、必要事項をご記入の上、企画計画課ふるさと寄附金担当へ郵送・FAX・直接持参・メールのいずれかの方法で提出

鎌倉市共創計画部企画計画課ふるさと寄附金担当
〒248-8696 鎌倉市郡成町18-10
TEL.0467-61-3845 (R).0467-23-8700(代表)
E:ふるさとok@city.kamakura.kanagawa.jp



問合せ